

八幡昌樹の社会科（第3学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

新学習指導要領では、社会科の目標として「グローバル化する国際社会に主体的に生きる」ことが加わった。グローバル化する社会の変化を見据えて大事になるのは、社会と外国とのかかわりをとらえることである。日本は昔から、外国のものや文化を取り入れて自国化することで、生活を豊かにしたり文化を発展させたりしてきた歴史がある。社会と外国とのかかわりとは、「外国とのかかわりがあることで豊かな生活ができる」ことだと言える。私は、3学年において**社会的事象の要因や目的を追究し、地域社会と外国とのかかわりをとらえる子ども**の育成を目指す。

これまで、子どもは外国との関連を調べ、例えば「いろいろな国から商品が届いている」といったような事実をとらえてきた。その事実をとらえさせても、外国とのかかわりがあることで豊かな生活ができるとまでは考えさせてこなかった。だから、私は外国との関連が見える事実を提示して、事象の要因や目的を追究する学習問題を設定するという改善を図る。これによって、子どもは空間的な広がりに着目する「見方・考え方」が引き出され、地域社会と外国とのかかわりに対する問題意識を高めて課題解決を図っていくのである。

また、3学年の子どもは、調べて分かった事実を関連付けて考えることに難しさがある。ただ分かったことを書かせるだけでは、分かった事実を整理してまとめられるようにならないからである。そこで、調べるときにあらかじめ追究の視点を明確にし、その視点の数に合わせたチャート図を提示する。これによって、子どもはその視点で資料を調べ、分かったことが整理できる。整理されたことで関連付けて考えることが容易になるのである。

私は、このような改善を図ることで目指す姿に迫っていく。

また、上述のように、社会と外国とのかかわりに関する学習ができる単元は、4年間の社会科の中でも限られている。例えば、3学年の「市の様子の変り変わり」、5学年の「我が国の食糧生産」、6学年の「グローバル化する世界と日本の役割」などである。だから、4年間を見通した上で、各学年で社会と外国とのかかわりをとらえられる子どもを育てていく必要がある。私は、3学年において、外国とのかかわりをとらえられる単元を開発していく。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
○社会生活に関する知識 ・外国とのかかわりがあって豊かな生活ができること ○具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能	○考えたことや選択・判断したことを表現する力 ○社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力	○地域社会の一員として、よりよいまちづくりに協力しようとする態度 ○主体的に学習の問題を解決しようとする態度

3 主張する働き掛け

子どもは、事象に関する調査活動を行うなど、問題解決的な学習を通して事象に関する追究を進めている。そして、これまでに具体的な知識を獲得し、事象の特色や相互の関連もとらえている。

これまでの学習や生活経験から、外国とのかかわりがあるという事実には気付いているが、その理由や生活を豊かにしているとまでは考えていない(C0)。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

事象について、外国との関連が見える事実を提示し、疑問に思うことを問う。

事例についての要因や目的に関する学習問題を設定させるための働き掛けである。

まず、事象について、外国との関連が見える事実を提示し、気付いたことを問う。空間的な広がりやの視点を引き出すためである。子どもは、提示された事実から既知の知識を想起したり、気付いたりしたことを表出する。

そして、疑問に思うことを問う。子どもは、**空間的な広がり、人々の工夫や努力に着目する**「見方・考え方」を働かせ、事象の要因や目的に関する学習問題を設定する**(①知識・技能③態度)**。

働き掛け2

学習問題に対する予想と理由を問う。

設定した学習問題を追究する過程に見通しをもたせるための働き掛けである。

学習問題を設定した子どもに、学習問題に対する予想と理由を問う。予想は既知の知識を表出させ

るためであり、さらに理由を問うのは追究の視点を明確化するためである。子どもは、これまでの学習や生活経験を想起し、**空間的な広がり、人々の工夫や努力に着目する**「見方・考え方」を働かせ、学習問題に対する予想をし、その理由も表出する**(①知識・技能③態度)**。出された予想を共通点毎に分類して板書する。子どもは、複数の視点から考えていけばよいと考える。このように、学習問題に対して予想し、追究の視点を明確化した子どもは、追究の過程に見通しをもっている状態である。

働き掛け3

調査活動を設定し、結論を問う。

課題解決に必要な事実を調べ、事例についての結論を出させるための働き掛けである。

学習問題を解決する見通しをもった子どもに、調査活動を設定する。ここで設定する調査活動は、子どもが課題解決に必要な資料から調べたり実際にインタビューをしたりすることなどである。さらに、働き掛け2で明確化された視点の数に応じて、チャート図を提示する。子どもは、**空間的な広がり、人々の工夫や努力に着目する**「見方・考え方」を働かせ、資料から分かったことを視点ごとに整理しながらチャート図に記述していく**(①知識・技能、協働性、ツール活用能力)**。

調べて分かったことから学習問題に対してどんなことが考えられるかを問う。子どもは、**空間的な広がり、人々の工夫や努力に着目する**「見方・考え方」を働かせ、友達の考えとつなげて話し合い、事例についての結論をまとめる**(①知識・技能②思考力・判断力・表現力)**。

働き掛け4

事例と同じようなものがほかにあるかを問い、もう一度調査活動を設定する。

事例から一般化を図らせるための働き掛けである。

取り上げた事例から外国とのかかわりに気付いた子どもに、「事例と同じようなものがほかにあるか」と問う。事例から一般化させていくためである。子どもは、**空間的な広がり、人々の工夫や努力に着目する**「見方・考え方」を働かせ、「ほかにもありそうだ」と考える。そして、子どもに確かめたいことを問う。子どもは「ほかにどんなものがあるのか調べたい」と考え、それを新たな学習問題として設定する**(①知識・技能③態度)**。新たな学習問題を設定した子どもに、それを解決させるため、もう一度調査活動を設定する。子どもは、**空間的な広がり、人々の工夫や努力に着目する**「見方・考え方」を働かせ、事例と同じようなものが多くあることに気付く**(①知識・技能、協働性)**。

働き掛け5

検証のための資料を提示し、学習問題に対する結論、自分の考えを問う。

学習問題を解決させ、地域社会と外国とのかかわりをとらえさせるための働き掛けである。

どうすれば考えたことが確かめられるかと問う。自分の考えの検証を促すためである。子どもは、確かめられる資料を調べればよいと考える。そこで、考えを確かめられる資料を提示する。子どもは、自分の考えと照らし合わせて確かめる。

自分の考えを確かめた子どもに、学習問題の結論、自分の考えを問う。結論に対する自分の考えは、自分の生活とつなげて考えたことを書くことに継続的に取り組んでいる。子どもは、**空間的な広がり、人々の工夫や努力に着目し、自分の生活と関連付けて考える**「見方・考え方」を働かせ、地域社会と外国とのかかわりをとらえる**(①知識・技能②思考力・判断力・表現力)**。

このようにして、子どもは**社会的事象の要因や目的を追究し、地域社会と外国とのかかわりをとらえる子ども**(Cn)になる。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け5を受けて、地域社会と外国とのかかわりをとらえることができたかを、ノートの記事から検証する。
- ② 働き掛け1、2、3、4、5を受けて、社会的事象の「見方・考え方」を働かせていたかどうかを、発言やノート、チャート図の記事から検証する。
- ③ 働き掛け1、2、3、4、5を受けて、想定した資質・能力を発揮していたかどうかを、ノート、チャート図の記事から検証する。

5 年間の授業計画

- | | | | |
|-------------|------|--------------|--------|
| (1) 指定研究授業 | (7月) | 「店ではたらく人の仕事」 | (15時間) |
| (2) 中間検討会 | (9月) | 「昔の道具とくらし」 | (10時間) |
| (3) 初等教育研究会 | (2月) | 「新潟市のうつりかわり」 | (9時間) |